



ネットワークとコミュニティの力で地域の活性化を促進

『静岡・地域生産性 向上プロジェクト』のご案内



〒102-8643 東京都千代田区平河町 2-13-12
公益財団法人日本生産性本部 自治体マネジメントセンター
☎ 03-3511-4013 ✉ public@jpc-net.jp

発行 公益財団法人日本生産性本部

協力 静岡県立大学国保研究室

もくじ

| | |
|----------------------------|----|
| 1 はじめに | 2 |
| 2 プロジェクトメンバーの構成 | 3 |
| 3 これまでの沿革 | 4 |
| 3-1. 2022年度の活動 | 4 |
| ①産官学が連携したワークショップの開催 | 4 |
| ②先進地域との交流 | 4 |
| ③地域目標の取りまとめと発信 | 5 |
| 3-2. 2022年度の振り返りとその後の発展 | 6 |
| 3-3. 2023年度の活動 | 6 |
| ①オープンラボの定期開催 | 6 |
| ②発表会の開催 | 8 |
| ③3つのチームプロジェクトの概要 | 9 |
| 1「事業承継と後継者育成」プロジェクト | 9 |
| 2「小学生・教職員への教育支援」プロジェクト | 9 |
| 3「働くことへのモチベーションアップ」プロジェクト | 10 |
| ★特別回：地域づくり日米交流会 | 10 |
| 4 参加メンバーからのコメント | 11 |
| 阿部 萌々果さん(静岡県立大学国保ゼミ3年生) | |
| 井出 雄大さん(静岡銀行) | |
| 岩本 茉祐花さん(東京海上日動火災保険) | |
| 大澤 明梨さん(静岡市) | |
| 柿原 貴さん(静岡ガス) | |
| 国保 祥子さん(静岡県立大学准教授) | |
| 小林 真久さん(静岡県立大学国保ゼミ3年生) | |
| 小林 祐介さん(草薙カルテッド) | |
| 齋藤 亮(日本生産性本部) | |
| 杉村 一行さん(静岡市) | |
| 西崎 秋芳さん(連合静岡) | |
| 福富 仁子さん(静岡ガス) | |
| 宮島 涼華さん(静岡県立大学国保ゼミ3年生) | |
| 望月 椰生くん(常葉大学教育学部附属橋小学校2年生) | |
| 望月 麻里子さん(国保研究室秘書) | |
| 5 まとめ | 13 |
| 5-1. これまでの総括 | 13 |
| 5-2. 今後の展開 | 13 |
| 5-3. 地域づくりのお役立ち情報 | 14 |
| ①地方創生カレッジ | 14 |
| ②国保研究室(KOKULABO)のオープンラボ | 14 |

1 はじめに



私たちが暮らす地域社会は、これまでにない厳しい環境に直面しています。人口減少や新型コロナウイルス感染症のような行政や企業だけでは解決が難しい複雑な課題が次々噴出し、地域の持続性を脅かしています。こうした課題に対応するためには地域のさまざまな関係者が協力し、共に問題解決に取り組む必要があります。

さらに、持続可能な地域社会を築くためには、組織や地域に暮らし働く個人の「生産性」を向上させることが求められます。これは単に効率を高めることだけではなく、限られた地域資源を最大限に活用し、生活の質や地域の価値を高めるための取り組みです。

公益財団法人日本生産性本部では、生産性に関する調査・研究や人材育成、経営コンサルティングなどのソリューションを地域社会の官民へ広く提供してまいりました。これらの活動を通じて弊財団には地域の関係者との良質なネットワークや、組織・個人の生産性向上に関するノウハウが蓄積されています。

そこで、複雑性の高い課題にネットワークの力で向き合い、地域の課題解決と生産性向上を両輪で取り組んでいく新たなプロジェクト「静岡・地域生産性向上プロジェクト」を静岡市で立ち上げました。

このプロジェクトは、趣旨に賛同いただいた静岡市内の企業、行政、団体、大学などの関係者が結集して2022年度に発足しました。

初年度は「ダイバーシティ・インクルージョン」と「人口流出」を議題に設定し、静岡県立大学経営情報学部 国保祥子准教授と、龍谷大学政策学部 白石克孝教授のサポートを得ながら女性や若者の人口流出に関して、地域、組織、個人の観点から深い議論と分析を行いました。その結果、「地域一体で若者を育てる風土の醸成」や「社会人と学生の新たな連携」が人口流出防止の鍵であるとの共通認識に至りました。

そして2023年度は、静岡県立大学国保研究室と連携し、社会人と学生が分け隔てなく関わるができる心理的安全性の高いコミュニティを形成しながら地域一体的に学生の育成を図っていくモデルの構築に取り組みました。地域の課題解決にむけたプロジェクトを学生が主体的に立ち上げ、社会人の支援を得ながら推し進めることで、地域の課題解決と個人個人のスキル(生産性)向上を同時に図ることを目指して活動を重ねてまいりました。

この冊子では、写真や参加メンバーの声などを交えながら2年間の活動内容を紹介します。

本プロジェクトは今後も国内外の先進事例などを参考にしながら地域の課題解決と生産性向上にむけて活動を進めてまいります。読者の皆様のなかで、もし本プロジェクトに興味を持っていただけた方は私たちの活動の仲間に加わっていただけると幸いです。

2 プロジェクトメンバーの構成

このプロジェクトは、静岡の多くの組織や団体等と共に「コミュニティ」として活動をしています。



コミュニティは、コミュニティ全体の運営を検討する「リーダーシップチーム」と、活動を支援する「メンバーシップチーム」の2つの役割に基づいて構成されています。



本プロジェクトは日本生産性本部が主体となり、国保研究室 (KOKULABO) の協力のもと実施しています。プロジェクトには静岡市内の企業・行政・団体・大学などから約10組織が参画いただいております、これまでに50名を超える方々が携わってきました。多様な組織・立場の方に集結いただくことで、それぞれが持つノウハウや経験を活かしながら複雑性の高い課題に向き合っていくコミュニティとして活動を進めています。

3 これまでの沿革

3-1 2022年度の活動

①産官学が連携したワークショップの開催

2022年4月から2022年12月にかけて、計6回のワークショップを静岡市内とオンラインで開催しました。産官学から集まったメンバーから構成される4つのグループに分かれ、地域の課題の発見、課題の分析、真因（課題が発生する根本要因）の特定、目標の設定まで取り組みました。当初はダイバーシティ・インクルージョン（多様な人材の活躍）の停滞をテーマとして議論が進みましたが、徐々に方向性がシフトし、静岡が抱える最大の地域課題の一つといえる「女性を中心とした若い人材の流出が止まらないこと」が各グループ共通の議題に設定されました。

ワークショップには学生を含めてさまざまな立場の方が参加するため、静岡県立大学経営情報学部 国保祥子准教授や、龍谷大学政策学部 白石克孝教授による講義、地方創生カレッジのeラーニング講座の活用などによって議論の下地となる知識のインプットも随時行うことで、前向きかつ質の高い対話を促進しました。

②先進地域との交流

2022年9月には、産官学が連携した先進的な取り組みを進める地域との交流として福岡地域戦略推進協議会の前田真 事務局次長をお招きしました。

福岡地域戦略推進協議会は福岡都市圏の地域戦略の策定から推進までを一貫して行う、産学官民一体の『Think Doタンク』です。新産業の創出や多様な人材の活躍など、単独の組織では解決の難しい諸課題に地域一体で対応するため、2011年に民間企業、行政（福岡県・福岡市）、大学、経済団体などが中心に設立され、現在では200社を超える企業、団体などが会員に加わって活動を推進しています。

福岡地域でどのように産官学の連携が進み、地域のイノベーションや人材の活躍につながる取り組みが実現されたのかを知る機会となりました。



③地域目標の取りまとめと発信

2023年1月にはこれまでに開催したワークショップや先進地域との交流を通じて検討を重ねてきた成果を発信する発表会を静岡市内のホールで開催しました。

4つのグループそれぞれから「女性を中心とした若い人材の流出が止まらない」課題が発生する要因に関する分析の結果や、課題を解決するために向かうべき地域の方向性、具体的な数値目標について発表を行いました。



検討結果の例

目指す課題の定、達成したい目標

まとめとKPI
(政策形成サイクルSTEP3)

A 人材が一つの会社に取まらない状態
(地域の会社間で人材を共有する、社会人も地域全体で育てる)

グループで話し合った課題意識

グループで話し合った課題意識

| 目指す課題に合わせた指標 | 現在の水準 | 目標水準 |
|---------------------------------------------|-------|--------------|
| 自給率向上で地域経済を活性化させること (企業間交流、副業、兼業、社会貢献活動) | —% | 10%増 10%増 |
| 個人のキャリアを考えた働き方 (ワークライフバランス、副業、兼業) | —% | 10%増 10%増 |

真因のまとめシート (政策形成サイクルSTEP1~2)

理想 誰もが多様性を尊重されて静岡に暮らし働き続けたいと思っている

ギャップ

『自己実現のチャンスが
少ないと思われる』

現実 若い女性を中心に大都市への流出が止まらない

これを
解決するべき問題
と捉えた場合

個人の自己選択の余地を狭めている
—選択肢が物理的に限られている (地域/組織)
—選択を尊重する文化がない (組織)
—現状に満足、または環境の変化を恐れ、
新しい選択肢を主体的に生み出していない (個人)
—希望のキャリアを考えるきっかけがない (個人)

—働くために我慢するのが当たり前
という風土、不寛容さ (組織/個人)
—異なり、帰属意識の強さ (=しがらみ)
の強さと同化・同調圧力 (地域/組織/個人)

問題を構成する要素
はなにか?
なぜその問題が生ま
れるのか?

**組織と個人が、ともに成長していこうという
姿勢や関係性が希薄**

問題を生む
根本要因
(真因)



※2022年度の活動の詳しい様子は地方創生カレッジ内に掲載しています。

https://www.chihouseusei-hiroba.jp/support_projects/shizuoka_productivity.html

3-2 2022年度の振り返りとその後の発展

2022年度は産官学混成によるグループを形成し、「女性を中心とした若い人材の流出が止まらないこと」を地域の課題に設定。課題が生まれる要因の分析や、目標の設定などを行うワークショップを重ねました。その結果、「若い人材の活躍を推進する風土の醸成が不可欠」「地域が面となって若い人材の育成に取り組むことが重要」という共通認識を得ることができました。

2023年度には得られた共通認識を具体的な形にしていくため、静岡県立大学の国保研究室と連携しながら、地域が面となって若い人材の活躍を推進していく対話と実践の場を設けました。月に1回程度のペースで静岡県立大学の国保研究室に集まり、学生と社会人が一緒になって、若い人材が静岡でイキイキ活躍していくためにはどんな環境があったら良いか、学生の育成に社会人がどのような貢献ができるかなどについて議論を深めました。

そこで、まずはメンバーで小さな成功体験を積み上げることをプロジェクトの目標に設定しました。国保ゼミの学生が地域の人材に関して課題だと思っていることや自身が挑戦したいと思っていることを発案し、社会人はこれまでの経験や人脈などを活かして学生の想いを実現するサポートを行うものです。学生がリーダーを務めるチームが合計3つ立ち上がり、チーム単位で学生と社会人が協力しながら市内で座談会や交流会などの取り組みを企画し、実現していきました。

これまでは組織や立場の違いから距離があった学生と社会人の関係がチーム活動を通じて親密になり、静岡の未来にむけて協働していく多世代・多組織型のサードプレイスともいえるコミュニティが形成されました。地域の課題に紐づいた学生の想いを叶えていく一連の活動を通じて、活動に携わった一人ひとりの学生の成長を社会人が後押しをすることで、地域の課題解決、学生のスキル育成、さらには社会人同士の連帯も含めて地域の一体感の醸成を促進する大きな一歩を踏み出した一年になりました。

3-3 2023年度の活動

①オープンラボの定期開催

静岡県立大学の国保研究室では、2011年から学生と社会人が交流する場「フューチャーセンター」を開催しています。これまで多くの企業と連携し、2019年度にはGood Design賞を受賞するなどの活動実績を重ねています。本プロジェクトでは、このフューチャーセンターをリニューアルする形で「オープンラボ」を開催しました。メンバーは定期的に静岡県立大学の国保研究室に集まり、対話を通じてプロジェクトを進めました。



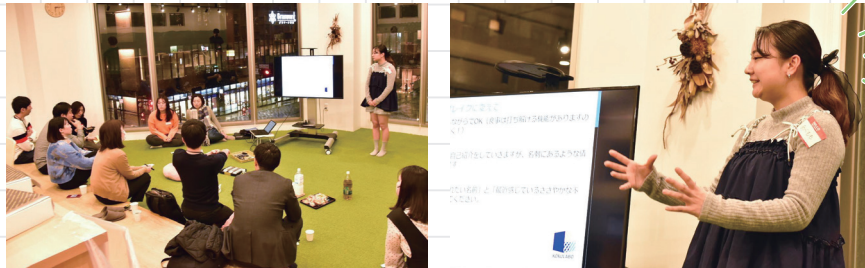
1回目は、2023年12月19日(火)に、静岡県立大学国保研究室にて開催しました。この日は、2022年度の「静岡・地域生産性向上プロジェクト」の内容を共有し、プロジェクトメンバー間の共通認識を作りました。



2回目は2024年1月16日(火)に開催しました。国保研究室の3年生が取り組んでいるプロジェクトを進めるうえでの悩み事に、プロジェクトの社会人メンバーが相談にのることで、対等に話ができる関係性を構築することができました。



3回目は2024年2月5日(水)にコラボレーションスペースTaktにて開催しました。これまでのプロジェクトの議論を踏まえ、国保研究室のゼミ生3人から「地域の人材育成」に関連した課題や挑戦したいテーマを発表して議論を深めました。その結果、「事業承継と後継者育成」「小学生・教職員への教育支援」「働くことへのモチベーションアップ」の3つのテーマごとプロジェクトが立ち上がり、それぞれ学生と社会人混成のチームを構成しました。



4回目は2月13日(火)、5回目は2月20日(火)、6回目は2月27日(火)、7回目は3月7日(木)、8回目は3月13日(水)、9回目は3月18日(月)に、それぞれ静岡県立大学国保研究室で開催しました。各回のオープンラボでは、全体での進捗共有や相談、チームごとのディスカッションを通じてプロジェクトを進めました。各チームはネットワークを活かして関係組織の協力を得ながら、年度内に座談会などのトライアルを実施しました。



②発表会の開催

2024年3月22日(金)には、報告会と交流会をコラボレーションスペースTaktにて開催しました。報告会には今年度のプロジェクトメンバーの関係者だけでなく、地元企業や近隣自治体、大学関係者など、幅広い年齢層の近隣住民などに参加を呼び掛け、さまざまな人が集う場となりました。トライアルに協力してくれた経営者が、応援に来てくれるという場面もありました。

報告会では、和やかな雰囲気の中でチームごとにこれまでの活動内容の報告を行いました。トライアルの実施結果を踏まえた提案や、関わったメンバーたちが経験を通じて学んだことを共有すると、参加者からも活発に質問が相次ぎました。元々のメンバーは意欲や連帯感が更に高まり、今回はじめて参加した方からも「次から自分も関わりたい」という声もいただくなど、次年度以降の活動の基盤となるコミュニティづくりの場になりました。



◀ 当日の発表資料はこちら
<https://note.com/kokulabo/n/n675488f500f5>



これまでの沿革

これまでの沿革

③3つのチームプロジェクトの概要

1 「事業承継と後継者育成」プロジェクト

チームまーくん 小林真久・岩本茉祐花・杉村一行

私のチームでは、「親から事業を承継する可能性のある学生と、実際に親から事業を承継した経営者の座談会」の開催を目指してプロジェクトを行いました。

会を開きたいと思ったきっかけは、私自身、将来親から事業を継ぐ可能性があり、継承を見据えた場合に卒業後のキャリアや今後の人生でどのような選択をしていけば良いか悩んでおり、事業承継経験者の話を聞いてみたいと思ったことです。また、社会人の事業承継者のネットワークはあるものの、継承の可能性がある「学生」がつながるコミュニティはありません。そこで継承可能性のある学生を集め、継承経験のある経営者との座談会を企画しました。

3月12日に静岡市コ・クリエーションスペースにて、学生3名と経営者3名の座談会を行いました。まず経営者から、就職や、転職、親の事業を承継する際にどのようなことを考えたか、継承してからどんな出来事に直面したかなどお話しいただきました。その次に学生側が、現在不安に思っていることや気になっていることなどを質問しました。

「経営者は大変なところもある」と言いつつ、前向きに熱意を持って仕事をしている経営者たちの姿を見ることで、学生からは「経営者をやってみたくなった」「身が引き締まった」といった感想をいただきました。経営者からは「経営者同士で似たような悩みを共有できたことが印象に残った」「学生が社会人になっても交流が続いたら魅力的だと思う」といった感想をいただき、こうした場の必要性を確認することができました。

写真:3月12日に実施したトライアルの様子

2 「小学生・教職員への教育支援」プロジェクト

チームあべもも 阿部萌々果・柿原貴・小林祐介

私たちは、「大学生が小学生のためにできることを考えよう」というテーマでプロジェクトを行いました。小学生の頃に受けた刺激が将来の夢を形作るようになった自らの体験から、今度は大学生である自分が、小学生に経験を提供する側にならないかと考えました。あわせてマイテーマとして、「他者との話し合いの中で異なる意見を組み合わせ、より良いものを作り出す」を掲げました。

その想いに共感してくれた東海大学・聖徳大学・常葉大学の学生と「大学生が小学生のためにできることを考えようの会」を開きました。話し合いの中で、大学生と小学生が関わる機会そのものが小学生にとって刺激のある経験になるのではないかと考えに至り、大学生と小学生がペアになって大学内や大学周辺で遊ぶ「遠足」という企画を考案しました。4月以降にヒアリングにご協力いただいた小学校に提案し、実現に向けて行動していきます。

このプロジェクトは、時には社会人の知恵や考え方を吸収しながら、大学生の同志と想いを共有し合うことで、私の想いを実現させる第一歩となりました。

写真:3月17日に実施したトライアルの様子

3 「働くことへのモチベーションアップ」プロジェクト

チームおすず 宮島涼華・井出雄大・大澤明梨・齋藤亮

私のチームでは、学生と社会人が仕事や働くことについて話し合う場を作るプロジェクトに取り組みました。自分が大学3年生になり就職を意識したときに、周りにロールモデルとなる社会人がいないことや社会人とつながる機会がないことから、「働く」ことのイメージを明確に持てないという課題を感じていました。このことが会を開ききっかけとなりました。

この会では3つの目的を設定しました。1つ目は「実際にいきいきと働く社会人の話を聞くことで、働くことへの不安を解消する/働くことに対する意欲を上げる」です。就職先が決定している学生や就職活動前の学生が、働くことへの不安を解消できるまでとことん話せる場を作ることを意識しました。2つ目は「多様な社会人のロールモデルを知ることで、視野を広げる」です。考え方の幅が狭くならないように、多様な年代、性別、職種、業種の社会人を集めました。3つ目は「意欲的に働く社会人同士のつながりを作る」です。社会人同士の異業種交流によって、いきいきと働く人たちがつながり、お互いのワーク・モチベーションの向上につながって欲しいと思いました。

この3つを目的に据え、3月14日にコワーキングスペース「=ODEN」でキャリアに関する学生と社会人の座談会を実施しました。参加者からは「キャリアを見直すきっかけになった」「働くことへの考え方が広がり、前向きになれた」などの意見をいただきました。私自身も社会人との交流を通じて不安や固定概念が払拭され、働くことに対してポジティブなイメージを持つことが出来ました。今後もこのような取り組みを続けることで、いきいきと働いていく人を増やしていきたいと思えます。

写真:3月14日に実施したトライアルの様子

★特別回:地域づくり日米交流会

2023年9月22日(金)は特別回として、コミュニティの力で社会課題の解決にむけた先進的な取り組みが進んでいる米国から2名の専門家を招き、日米で地域づくりの未来について意見交換する交流会を実施しました。米国における"Communities of Excellence"のフレームワークやコミュニティ運営の要となるマインドセットなどについて学ぶとともに、静岡における地域づくり活動を紹介しました。

お招きした専門家

米国コミュニティ
エクセレンス事務局長
Stephanie Norlingさん

米国コンサルタント
ボルドリッジ専門家
Craig Andersonさん



4 参加メンバーからのコメント



阿部 萌々果さん (静岡県立大学国保ゼミ3年生)

プロジェクトを通して、普段関わることのない社会人の皆さんと対等な立場に立って対話をするという貴重な経験ができたことを大変嬉しく思います。また、社会人は社会に出ているからこそ分かること、学生は学生視点で考えるからこそ見えてくることがあり、それをそれぞれの立場から共有することでお互いにとって刺激のある場になっていったと思います。このような学生生活では得られない経験やつながりをこれからも大切にしていきたいです。

井出 雄大さん (静岡銀行)

静岡で暮らす社会人として、この地域の将来を担う学生の皆さんが「自分のやりたいこと・好きなこと」に心おきなく挑戦できる環境をつくりたい、という思いで、今回このプロジェクトに参加しました。学生が自力で何をすべきかを構想し、周りの大人を巻き込みながらやりたいことを実現していく過程での、その推進力や成長の速さに驚かされ、自分にとっても大きな刺激になりました。今後もこうした場づくりに貢献していきたいと思っています。



岩本 茉祐花さん (東京海上日動火災保険)

静岡で働く社会人として、静岡の学生を応援したい、静岡をもっと元気にしたいという思いで参加してきました。いつも対等な関係で、全員が全員の意見を受容する雰囲気が非常に居心地よく、まさにサードプレイスという言葉がぴったり当てはまると感じました。日々、学生さんの発想や行動力に驚かされ、先輩社会人の経験に圧倒され、私自身、得るものが大変多くありました。今後も、より多くの仲間と活動ができれば嬉しく思います。

大澤 明梨さん (静岡市)

本プロジェクトは、「地域にいる学生を大学だけでなく、地域で育てる」場だと感じています。近年の大学生は、大学の学業に加え、アルバイトや就職のためのインターンシップなど、「やらなければならない」ものが多く、「自ら主体的に」実行する活動機会が少なくなっているように感じます。本プロジェクトでは、「学生が実行したい」という活動を、地域の方で支援することができたと感じています。行政だけでなく地域社会全体で、今後も「やりたい」人を純粋に支援するムーブメントが起こってほしいなと思っています。



柿原 貴さん (静岡ガス)

今回の取り組みを通じて、学生や社会人といった自分に貼り付けられたラベルを剥がし、全員がコミュニティの一員という対等な立場で対話する場ができたこと、これが私にとって参加意欲の源泉になりました。学生と社会人との間に壁や隔たりが存在する訳ではなく、あるとすれば、それは私達の意識が作り出したものに過ぎません。今回の経験を糧に、今後、組織の内外で、日頃からさまざまな人が自然と混ざり合う場づくりに取り組んでいきたいと思っています。

国保 祥子さん (静岡県立大学准教授)

社会人経験を経て大学教育に携わるようになったときから、就職活動とは別の形で学生が社会人と接したり、経営課題に触れる機会を作りたいという思いを持っています。今回はオープンラボという形で開催しましたが、社会人側も学生側も楽しめる場になっていったと感じています。学生時代に地域の大人達とお世話になったという経験は、これから学生が生きていく上での支えになります。そして成長したら次の若者を支援する、そういう循環こそが地域の未来をつくるコミュニティなのだと思います。



小林 真久さん (静岡県立大学国保ゼミ3年生)

社会人の方と一緒に活動をするということがほぼ初めてだったのですが、仕事のスピード感や、進め方、できることの規模の大きさにすごく刺激を受けました。早く社会に出てこういった方々と仕事をしてみたいと思いましたし、自分がやってみたかったことにも、社会人のサポートを受け挑戦でき、本当に貴重な体験だったと感じます。多くの学生にこういった場を体験してほしいと感じました、もっとこういった場が増えてほしいと思います。

小林 祐介さん (草薙カルテッド)

学生が自分自身でやりたいことを設定し、さまざまな人の力を借りながら実践していくことは、私を含めて関わった学校の先生や他の学生の気づきも多かったと思います。学生が、「静岡にいたい・関わりたい・また戻ってきたい」と思うには、静岡の人の魅力に触れるというのが大事だと思っています。今回の取り組みをベースにこういった経験をできる学生がより増えてくるよう、引き続き応援していきたいと思っています。



齋藤 亮 (日本生産性本部)

私は静岡に生まれ、高校までこの地で育ちました。大学入学を機に静岡を離れましたが、上京してからも静岡に育ててもらったことへの感謝と共に胸に抱き続けていた「自分らしく地元とつながりたい」という想いをこのプロジェクトで形にすることができたことに大きな幸せを感じています。私にとって家庭でも職場でもない第三の居場所ともいえるこのコミュニティで、これからも静岡の皆さんと関わりを持ちながら地元に戻って来たいと考えています。

杉村 一行さん (静岡市)

学生と企業が上下関係なく、フラットにつながりを築くことができる場を作っていきたいと思い、この会に参加しています。公務員として地域のために何かしたい、という想いもありますが、毎回、学生や他の社会人から新たな気づきが得られる、どんなに通常業務が忙しくても、参加したら楽しかった、来てよかった、次も参加したいと思えるような雰囲気の会でした。今後は、もっといろいろな企業が参加し、この輪を広げていきたいと思っています。



西崎 秋芳さん (連合静岡)

このプロジェクトでの最大の収穫は「人」です。多くの人と触れ合い、優しく接していただき、刺激をいただくことができた2年間でした。そして何より、学生の皆さんが努力した成果を目に見える形にして出してもらったことが、個人としても全体としても喜ばしいことだと深く感じる事ができました。ありがとうございました。

福富 仁子さん (静岡ガス)

本プロジェクトを通じて、学生の熱意ある行動や自由な発想と社会人の豊富な経験との融合により、新たな形を生み出す過程に立ち会えたことはとても良い経験となりました。また、学生と社会人が対等であり自由に発言できるこの場は、私にとって居心地のいいサードプレイスとなりました。この取り組みは、「自分と地域とのつながり」を感じられる機会となりますので、ぜひ多くの方に知ってもらえるように伝えていきたいと思っています。



宮島 涼華さん (静岡県立大学国保ゼミ3年生)

社会人の方とチームを組みプロジェクトを進めることで、普段は経験することのできない、社会人のイベントの運営の仕方や企画の進め方を一番近くで学べるところが良い点だと感じました。また、会を重ねるごとに、立場に関係なく対等に話し合う空気が出来上がってきて、学生、社会人どちらにとっても居心地の良い場所になっていると思いました。ここで得たものを他の場所でも活かしていきたいと思っています。

望月 椰生くん (常葉大学教育学部附属橘小学校2年生)

まーくんやあずみんと、お絵かきバトルやみかん早食いきょうそうをしたりして、友だちになれて楽しかったです。もっとみんなといっぱいあそびたいです。



望月 麻里子さん (国保研究室秘書)

「参加する誰もが対等で楽しいと感じられる環境づくりのサポート」が私の役割だと思っていたのですが、率直な意見を受け容れてもらえたり、自分では考えたことのない想いを聞けたりして、とても刺激的な経験をいただけてしまいました！

5 まとめ



5-1 これまでの総括

2022年度は、産官学混成によるグループを形成し、ワークショップを重ねながら若年人材の流出という地域の課題の分析や、目標設定を行いました。その結果、「若い人材の活躍を推進する風土の醸成が不可欠」「地域が面となって若い人材の育成に取り組むことが重要」という共通認識を得ることができました。

その共通認識を踏まえ、2023年度には国保研究室と連携しながら、地域が面となって若い人材の活躍を推進していく対話と実践の場を設けました。学生と社会人が一緒にプロジェクトに取り組むことで豊かな関係性が生まれ、静岡の未来にむけて協働していく多世代・多組織型のサードプレイスともいえるコミュニティが形成されました。

2024年度以降はこのコミュニティをさらに広げ、より広範囲に地域の課題解決や人材の育成に取り組んでいきます。

5-2 今後の展開

本プロジェクトでは、今後もネットワークやコミュニティの力によって地域の課題を解決する試みを展開してまいります。静岡を誰もが暮らし・働き続けたい地域にすることを目指して、メンバーの連帯感を高めながら地域が一体となって若い人材の育成に取り組む、地域の魅力や生産性の向上にむけた活動を進めていく予定です。

また、日本生産性本部では米国において取り組みが進められている“Communities of Excellence”のフレームワークを基に、“日本版コミュニティ・エクセレンス”の活動を国内で推進しています。

“Communities of Excellence”は米国「マルコム・ボルドリッジ国家品質賞」のフレームワークをコミュニティに適用して社会課題を解決しようとする取り組みです。企業や団体がバックボーン組織として連携し、コミュニティとして共有した成果を実現するために行動するプロセスを通じて米国各地で目に見える成果を上げています。

静岡においてもこの“Communities of Excellence”の取り組みを参考にしながら、さまざまな関係者との協働による地域の課題解決にむけて更に前進してまいりたいと考えています。



静岡での日米交流会



熊本での国際カンファレンス



日本版コミュニティ・エクセレンスの詳細はこちら
<https://www.jpc-net.jp/consulting/pi/j-coe.html>

5-3 地域づくりのお役立ち情報

① 地方創生カレッジ

日本生産性本部では地方創生を担う人材を育成・確保するため、地方創生カレッジ(内閣府補助事業)を実施しています。

地方創生カレッジでは200を超えるeラーニング講座を提供しています。「デジタル」「SDGs」「脱炭素」など地域のホットな政策を扱うものから、「プレゼンテーション」や「ファシリテーション」など現場で役立つ実践的なスキルを扱うものまで幅広いラインナップを用意しており、いつでもどこでも無料で利用いただけます。

また、地方創生を前に進めるためには若い世代が地域の課題を「ジブンゴト」と捉えて活躍することが欠かせません。そこで地方創生カレッジでは若い世代が地方創生を身近に感じ、一歩踏み出すことを後押ししていく「学生が主役の地方創生プロジェクト」を全国各地で実施しています。

2022年度には静岡県立大学国保研究室と連携して、静岡市・静岡銀行の後援のもと、学生が主役となって静岡の課題を自ら発見し、課題解決につながる取り組みを企画・実施するプロジェクトを行いました。

ぜひ地方創生カレッジを皆様の地域づくりの活動や人材育成などにご活用ください。



地方創生カレッジのホームページはこちら
<https://chihousei-college.jp/index.html>



「学生が主役の地方創生プロジェクト」の詳細はこちら
<https://chihousei-college.jp/e-learning/school.html>

② 国保研究室(KOKULABO)のオープンラボ

静岡県立大学の国保研究室は、問題解決や未来への提案を行うためのLearning Communityであり、地域社会と教育現場との溝を埋めるプラットフォームとして、学生と社会人が共に地域の未来を発信していくことを目指しています。

取り組みの柱は、学生によるプロジェクト学習(Project Based Learning)とワークショップ(オープンラボ)です。大学で学ぶ経営学や組織論の知識を活かし、企業や地域の問題解決のための調査や未来への提案を行ったり、研究室にさまざまな人を招いて問題解決やイノベーションのための対話の場を作ったりという活動を通じて、地域社会と教育現場とをつなげています。2019年には「KOKULABO フューチャーセンター」がGood Design賞(教育・推進・支援手法)を受賞しました。

Project Based Learning:地域の企業やNPOから持ち込まれた課題をテーマに、学生がチームまたは個人で4~5ヶ月間をかけて調査にとりくみ、提案を行います。これまでにリモートスタディの利点を活かしたサービス提案や、社会問題である空き家に関する課題分析と解決策の提案などを手掛けています。

オープンラボ:定期的に地域に研究室を開き、問題解決やイノベーションのための対話の場を作っています。



研究室ウェブサイト
<https://akiko-kokubo.com/kokulabo/>